

別紙様式 1

職名	所属系・部門等
教育職員	大学院工学研究院人間科学系
履 歴 書	
ふりがな	
氏 名 ロング、ロバート ウィリアム	
生年月日 1960年 3月 10日	
本 籍 アメリカ	
現住所 福岡県北九州市八幡東区帆柱5丁目6-11	
年 月	学 歴
1978年6月	チェンバレン高校卒業
1981年6月	フロリダ大学入学
1981年12月	同上卒業（英語教育学士）
1982年1月	フロリダ州立大学大学院入学
1983年8月	同上修了（英語教育修士）
1988年8月	フロリダ州立大学博士課程入学
1993年12月	フロリダ州立大学 スペシャリスト・ディグリー (ED.S) 取得（多言語・多文化教育）
年 月	職 歴
1982年 6月	ゲインズヴィル・アカデミー英語講師（フロリダ州）
1983年12月	同上退職
1984年6月	ギブツ・ギブラム学業・農業アシスタント（イスラエル）
1984年9月	同上退職
1985年5月	アワ・レイディー・オブ・グアダルペ・スクール英語・スペイン語講師（テキサス州）
1985年10月	同上退職
1988年3月	インナー・ハーバー・ホスピタル心理カウンセラー（フロリダ州）
1988年3月	同上退職
1988年3月	フロリダ州立大学英語教育強化センター 英語講師（フロリダ州）
1988年3月	タラハシ・メモリアル・リジョナル・センター 心理カウンセラー（フロリダ州）
1994年3月	同上退職（フロリダ州立大学英語教育強化センター）
1995年3月	広島修道大学客員教授
1996年5月	同上退職
1997年2月	インターナショナル・ビジネス・スクール日米語学学院英語講師・コンサルタント（福井県）
1996年4月	同上退職
2011年4月	九州工業大学工学部人間科学講座外国人教師 九州工業大学工学部人間科学講座准教授(現在に至る)

調 査 書

氏 名 ロング、ロバート ウィ
リアム

各研究系において定めた内部昇任候補者基準Aの各項目内容を赤字部分に記載の上、それに対応した業績等を記入する。

1. 教育

円滑な協働による、教育や学生指導の豊富な経験。FD活動やリレー科目などへの着実な参加

1. 研究機関及び教育機関における活動

1. 昭和63年8月～平成6年3月 フロリダ州立大学英語教育強化センター英語講師
(担当科目：初級～上級スピーキング、リーディング、ライティング、リスニング、文法。その他：カリキュラム開発委員会委員長、修士学生のための教育技能指導)
2. 平成6年4月～平成7年3月 広島修道大学人文学部客員教授
(担当科目：英米文化、英語コミュニケーション、1、2年生対象英語会話)
3. 平成7年5月～平成8年3月 インターナショナル・ビジネス・スクール日米語学学院英語講師・コンサルタント
(担当科目：ビジネスマン、エンジニア、警察官対象のビジネスクラスおよび一般クラス。その他：教育技能指導およびカリキュラムデザインコンサルティング)

(4) 九州工業大学 外国人教師 (担当科目：英語A、C、D、技術英語、大学院英語、選択英語)

自分の管理業務を満たすために、他の教員より週3コマ多く授業を担当している。その他、教員の英語論文のチェックや、国際宇宙大学プログラム派遣学生たちの支援を行なっている。

2. 現在の職務内容

1. 「英語AI」「英語AII」、「総合英語CI」、「総合英語CII」、「技術英語I」、「技術英語II」、「中級英語I」、「中級英語II」、「上級英語AI」、「上級英語AII」、「英語MI」、「英語MII」、リレー講義(適宜)、リレー・セミナー(適宜)を担当
2. オールド・ドミニオン語学研修プログラム(面接試験官、オリエンテーション担当)

3. FD/SD活動

工学部およびFD室の業務委託により英国でSD/FD調査を実施(2013年)

3. その他

- (1) 英語Aコーディネーター
プレゼンテーション・コンテストの企画運営
Eラーニングソフト「クライテリオン」の実施および管理
- (2) ランゲッジ・ラウンジ(LL)アドバイザー

2. 研究業績

正式な博士の学位。論文数20本以上。うち査読付き論文10本以上。過去6年間で査読付き論文4本以上。

※必要条件数のみの主たる論文等を次に記載。
別に全論文リストを添付すること。

著書, 学術論文等の 名 称	単 著 共 著 の 別	発行又は発表 の年月日	発行所, 発表 雑誌等又は発 表学会等の 名称	概 要
1. Student Reactions Concerning Quality of Life Issues 「生活の質の問題に関する 学生の反応」	単	1998年11月	<i>Kyushu Institute of Technology Research Manual, 46, 63-69.</i>	1997年、本学学生に向けた講義に関する論文。この講義の主目的は、質の高い生活を構成する8つの要素を理解させることであった。学生（とその親たち）には、これらの要素をランク付けすることを求めた。この結果について議論している。
2. Progress report: Surveying the Perceptions, Expectations, and Attitudes of Comprehensive English A students [進捗レポート：総合英 語Aの学生に対する認 識、期待、および態度の 調査]	単	1998年11月	<i>Kyushu Institute of Technology Research Manual, 46, 23-44.</i>	総合英語Aの学生態度に関する継続的な研究の報告。調査は1997年度の2週目に行なわれた。この調査では、学生が高校時代の英語教育についてどう考えているか、本学の英語教育に何を期待しているかを明らかにした。学生の姿勢の変化を探るため、2回目の調査を同じ年度の中頃に、3回目の調査を年度末に実施した。
3. Looking back: Student Attitudinal Change over an Academic year. 「振り返って：年間を通 した学生の態度の変化」	共	1999年10月	<i>The Language Teacher, 23 (10), 17-27.</i>	本稿は以下の二つの質問に焦点を当てている。(1)学生は過去と現在の言語学習体験をどのように見ているのか。(2)年度始め、前期の最後、年度末に実施した4つの調査で、何か重要な変化があるのか。結果、学生は、自分自身のやる気、教員の資質・個性・学生との関係について、極めて具体的な意見をもっていることが分かった。「査読付き」
4. Curriculum for Developing Cross-cultural Competency. 「異文化コンピテンシー を 開発するためのカリ キュ ラム」	単	1999年10月	<i>The Language Teacher, 23 (10), 29-34.</i>	本稿では、学生の異文化コンピテンシーをさらに向上させるため、従来の英語教育をどのように変えうるかを議論した。環境、機能、実際上の問題が述べられている。「査読付き」

<p>5. 20/20 Hindsight</p> <p>「20/20後知恵」</p>	<p>単</p>	<p>1999年5月</p>	<p>The Internet TEFL Journal, Vol. 5 (11), November, (1999). http://iteslj.org/Articles/Long-TeacherChange.html</p>	<p>本稿では、教員の変容過程、若い教員と年配の教員の違いを扱っている。目的は、個人として、職業人としての成長にかかわる問題を明白にすることである。対象は日本で12年以上教えているネイティブのEFL教員と、まだ1年間から3年間しか教えていない教員である。結果、若い教員よりも経験のある教員の方が、より寛容で、満足度が高く、リラックスし、うまく適応していることが分かった。「査読付き」</p>
<p>6. Adapting <u>DiPietro's</u> Strategic Interactions to an EFL Context</p> <p>EFLの文脈にDi Pietroの戦略的交流を適用する</p>	<p>単</p>	<p>2000年12月</p>	<p><i>The Language Teacher, Vol. 24 (12), pp.13-20.</i></p>	<p>様々な語用論的課題と交流をEFLの文脈に適用する方法について検討した論文。本論は、より効果的な教室での課題や教科書を考案するのに有効である。教科書、“Stepping Out”が、このような課題を反映している。「査読付き」</p>
<p>7. The Perlocutionary Effects of Complaints in Conflict Talk</p> <p>対立的会話における発話媒体の効果</p>	<p>共</p>	<p>2005年3月</p>	<p><i>KASELE Bulletin, 33, pp.75-84.</i></p>	<p>政治 討論における不平の発話媒介的な効果を分析した論文。データは、CNNのテレビショーCrossfireからの100の台本に基づく。データの分析は、Boxer (1993, 1996) が間接的な不平に対する反応をどう特定するかに基づく。結果、談話ではどのように不平が機能するかについて、明確なパターンがあることが明らかとなった。「論文全体の構成、データ分析、書き下しを担当」。「査読付き」</p>
<p>8. Japanese Students' Reflections and Advice based on their Study Abroad Program</p> <p>語学研修プログラムに基づく日本人学生の反省と助言</p>	<p>共</p>	<p>2006年 3 月</p>	<p><i>KASELE Bulletin, 34, pp.71-80.</i></p>	<p>この長期に及ぶ研究は、数年間にわたり集められた語学研修に関する九工大生の反省と助言に基づく。様々な考察は、日本語に翻訳され、現在、オリエンテーションで活用されている。「論文全体の構成、データ分析、書き下しを担当」。「査読付き」</p>
<p>9. Explaining It: Discussing Japanese Culture in English.</p> <p>「説明するということ：日本文化について英語で話し合おう」</p>	<p>単</p>	<p>2009年</p>	<p>Perceptia Press.</p>	<p>この第二外国語習得用図書は外国人に日本文化の14の側面について説明する際に、話の内容と流暢さのレベルアップを図る日本人学生を対象としている。会話の糸口と「言葉サポートのタスク」を提供している。</p>

<p>10. The Culture Compass, 2nd Edition</p> <p>「カルチャーコンパス」第二版</p>	<p>単</p>	<p>2009年</p>	<p>Lulu Press.</p>	<p>このESL図書は12の文化的テーマに基づいており、フォーマットは情報交換・誘導討論・批判的討論の三つのレベルに準拠する。文化的テーマは11ヶ国のスポーツから美化に至るまで幅広いものとなっている。</p>
<p>11. Stepping Out into Cross Cultural Interactions, Second Edition.</p> <p>「異文化の相互作用を楽しむ」第二版</p>	<p>単</p>	<p>2010年</p>	<p>Perceptia Press.</p>	<p>このEFLオーラル図書は食べ物や祭り、様々な会話の糸口となるような異文化のテーマ7つに焦点を当てている（ロールプレイを含む）。それぞれの糸口は、学生が海外で遭遇したり、日本国内で外国人と会った際に実際に起こりうる出来事を彷彿させる、やや現実的な出来事を想定したものとなっている。</p>
<p>12. Pausology and Interview Questions: A Case Study</p> <p>「間 (pause) 論とインタビュー：ケース・スタディ」</p>	<p>共</p>	<p>2010年3月</p>	<p><i>KASELE Bulletin</i>, 38, pp. 19-32.</p>	<p>学生インタビューにおける間 (pause) とその後続く流暢さへの影響の考察が、この論文の主題である。結果、間と結びついた様々な間違いには、前置詞、名詞や動詞の欠落、形容詞や語彙の反復が含まれることが明らかとなった。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当]。「査読付き」</p>
<p>13. Understanding Fluency in Novice Level Speakers</p> <p>「初心者レベルのスピーカーにおける流暢さの問題についての見解」</p>	<p>共</p>	<p>2010年6月</p>	<p><i>The Language Teacher</i>, 35, 6, 13-20.</p>	<p>本論文は初心者レベルのスピーチ中に見られるポーズとつなぎ語に焦点を当てている。沈黙、スピーチの長さ。平均長などについて65モノログを検討した。12人の学生から成る3つのグループは、それぞれ初心者・中級者・上級者とレベル別に分けられており、流暢さにおける差異が識別されるかについて調査した。結果、ポーズの持続期間に関しては差異が見受けられたものの、平均長やポーズの頻度については差異は見られなかった。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当]「査読付き」</p>

<p>14. Technical Matrix II 「工業技術の基盤 II」</p>	<p>単</p>	<p>2010年</p>	<p>Perceptia Press.</p>	<p>この工業技術英語の教科書は、機械、電気、化学、建設社会のエンジニア用である。各章は、全てのエンジニアに関連する多様なテーマを扱い、各分野のエンジニア向けの読み物も取めている。プレゼンテーション用教材も入っている。</p>
<p>15. Student Progress in Fluency and Grammatical Accuracy Over a School Term.” 「学期中における学生の言葉の流暢さと文法上の正確さに関する進歩について」</p>	<p>共</p>	<p>2011年3月</p>	<p><i>KASELE Bulletin, 39, 53-60.</i></p>	<p>本研究は大学の学期中のモノローグ中に頻繁に発生するポーズとダイアログに関するものである。本研究は流暢さと伝達能力に焦点を当てた。結果、一週間あたりの授業数が増えると、学生の能力が大幅に向上することが分かった。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当] 「査読付き」</p>
<p>16. Evaluating Writing Skills and Teacher Feedback Using an Online Writing Program 「オンラインプログラムを使用したライティングスキルと教師のフィードバックに関する評価」</p>	<p>共</p>	<p>2012年3月</p>	<p>2012 <i>KASELE Bulletin, 40, 69-76.</i></p>	<p>ETSのクライテリオン・オンライン・ライティング・プログラムを使用している本学1年生についての研究報告。本論文は大学の学期中に執筆した1,275枚の研究論文を含む。この研究は、学生の間違いと教員のフィードバックに焦点を当てている。結果、コンピュータのフィードバックは、形式や文の長さに関する間違いについてより多くの反応を返し、教員は意味に関する間違いに注目することが分かった。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当] 「査読付き」</p>
<p>17. A Longitudinal Study of Novice-level Changes in Fluency and Accuracy in Student Monologues 継続的研究：学生モノローグにおける流暢さと正確さが初心者レベルでどう変化するか</p>	<p>単</p>	<p>2012年6月</p>	<p><i>English Language Teaching, 5, 10, 129-137.</i></p>	<p>この研究は流暢さと正確さを習得するまでを一年間追跡調査したものである。結果として平均長と発声速度に関する有意な進歩が見られたが、二つのグループに関しては文法的な改善は見られなかった。「査読付き」</p>

<p>18. The Impact of Feedback on Lexical Complexity in English Compositions</p> <p>「英作文における語彙の複雑さに関するフィードバックの影響」</p>	共	2012年6月	<p><i>KASELE Bulletin, 41, 19-27.</i></p>	<p>学生の作文に対する教員のフィードバックがどの程度影響するのか測るため、1年次の最後の課題作文を分析した。たくさんのフィードバックがあった作文と全くフィードバックがなかった作文を用いた。結果、NWDs、語彙濃度、文の平均的長さに関し、ほとんど違いがなかった。語彙の複雑さにもそれほどの違いは表れなかった。よって、効果的なフィードバックは、体系的かつ焦点を絞ったものであるべきである。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当] 「査読付き」</p>
<p>19. A Review of ETS's Criterion Online Writing Program for Student Compositions</p> <p>「学生の作文のためのETSの標準オンラインライティングプログラムについての展望」</p>	単	2013年6月	<p><i>The Language Teacher, 37, 3, 13- 20.</i></p>	<p>この研究は日本の大学の一年生がETSの標準オンライン・ライティング・プログラムを使用していることに関する知見を報告するものである。本稿は二つの研究課題に焦点を当てている。</p> <p>1.ETSのコンピュータ化されたフィードバックと教員のフィードバックには大きな差異があるのか。</p> <p>2.学生は一年をかけて英作文を執筆して何かしらの進歩があるか。</p> <p>結果として、教員は意味に焦点を当てる傾向にあることが分かった。その一方でコンピュータ化されたフィードバックは文法と文体上の問題を中心的に扱うことが分かった。「査読付き」</p>

<p>20. 「大学生のグローバル化像に関する考察」</p>	<p>共</p>	<p>2014年3月</p>	<p><i>Kyushu Institute of Technology Bulletin</i>, 九州工業大学における学生調査をもとに March, 2014, Vol, 62, 69-85.</p>	<p>本稿の目的は、批判的思考の役割を調査することである。2種類のクラスを比較するため、アンケートと面談を行なった。2種類のクラスとは、一般的なトピックを扱う講義形式のクラスと、批判的思考の養成に重きを置いたクラスである。結果、批判的思考の方のクラスで、学期末、幾つかの小さな態度の変化があった。態度を変化させるには、より詳しい復習を繰り返す必要がある。[論文全体の構成、データ集積と分析、書き下しを担当]「査読付き」</p>
<p>21. Reaching Out: A Textbook for Developing English Conversation Skills. 「手を差し出す：英会話スキルを発達させるためのテキスト」</p>	<p>単</p>	<p>2014年</p>	<p>Perceptia Press.</p>	<p>このEFLオーラルテキストブックは仕事やスケジュール、趣味、最新の出来事、健康診断といったテーマにまたがる異文化間のテーマに焦点を当てている。多様なタスクのほかにも、このテキストには会話の糸口（ロールプレイ）や、会話案内が提示されている。各糸口と会話案内は、学生が海外で遭遇したり、日本で外国人と出会った際に実際に経験する可能性がある状況を反映しているため、やや現実的な設定となっている。</p>

科研費等の外部資金を研究代表者として、複数回以上取得していること。

1. 番号: 17104

研究者番号：00284589

研究期間：2012-2014

研究題目：Focusing on Fluency: Correlating Fluency and Syntactical Complexity Rates with TOEIC Scores

研究成果の概要

従来日本の英語教育では文法や用法が重視され、会話における流暢さは軽視されてきたが、これを見直したいという動機から研究を始めた。流暢さと話し手の語彙項目や統語的複雑さとの関連についての研究はあまり行われていない。そのため、本研究は以下の点に着目した：

(1) EFL学習者のTOEIC スコアの683点から793点までをレベル毎に分類して4種類の談話的な課題(Monologues, Dialogues, Structured Interviews, Summaries)を与えその類似点や相違点を検証する。

(2) モノログとダイアログの間の語彙的、統語的複雑さを比較して有意義な違いがあるか否かを検証する。

(3) 意思伝達上の自信や発言上の不安に伴う統語論的複雑さ等に伴う頻度の相違の検証を行う。

(4) 統語論的、音声的、語彙的、非流暢さ(dysfluency)が被験者のスコアに現れる熟達度に比例して減少していくかを検証する。結果は、以下の情報を示しました。発言上の不安 (Speech Anxiety) についてはdistress, discomfort, avoidanceの項目については有意義な違いは見いだせなかったが、fearの項目については有意義な違いが見いだせた。特に英語の母語話者についてはEFL学習者より公的会話(public speaking)を楽しんでいることがわかる。モノログについての統語的複雑さについては上記の3グループについて有意義な違いは見いだせなかった。モノログとダイアログについての流暢さ係数については、Mean Length Runs (MLR)と沈黙の度合いが最も顕著な頻度係数であることが判明した。今回の研究から統語的非流暢さについての係数は、発言の組立直し(retracing)や不適切なポーズに由来することが判明した。また音響的非流暢さについては発声時間の比率と間の出現頻度 (pause frequency)が特徴的であることがわかった。今回の研究からトイックのスコアは話し手の流暢さや口頭の発言能力を十分に反映するものでないことが示された。

2. 番号: 24520626

研究者番号：00284589

研究期間：2015-2017

研究題目：Investigating Fluency and Dysfluency in Gendered Discourse

研究成果の概要： 本研究では、男子学生と女子学生が会話した際に生じるコミュニケーション障害や吃音について調査する。内気さ、ストレス、不安も考察対象となる。得られた結果に基づき、語用論の問題について議論するとともに、学生たちにはコミュニケーション改善のための助言も行なう。

3. 社会貢献

学会委員会等の活動による貢献、地域貢献

Co-Program Chair for the International JALT2000 Conference (2000)

Co-Editor for the Language Teacher (2001 - 2002)

KASELE Journal 編集査読委員 (2004 - 現在)

The JALT Proceedings 編集査読委員(2007、2008、2010)

全国英語教育学会(JASELE)、九州英語教育学会 (KASELE) 会員

4. 管理運営

学内の委員会活動、運営業務に積極的に取り組み、貢献。教務委員など重要な業務の遂行。

工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステム運営委員会委員

入試監督

5. 望ましい条件

教育に関する顕著な貢献、優れた能力。科研費等を代表者として5回以上取得。単著の学術書の刊行（専門分野において権威ある出版社から）。学会、国際会議等での指導的な役割の遂行。重要な管理運営業務の豊富な経験。以上を複数個満足すること。

[教育] 工学部およびFD室の業務委託により英国でSD/FD調査を実施（2013年）

技術英語とEFL・ESL教科書の作成・出版

[研究] 科研費の獲得(2012年度～2014年度、2015年度～2017年度)

国際的雑誌での論文発表

- Language Teaching, (5, 10, 129-137) “A Longitudinal Study of Novice-level Changes in Fluency and Accuracy in Student Monologues”
- Differences in Lexical and Syntactical Complexity in Japanese Students’ Monologues and Dialogues.” (2013). *Journal of International Scientific Publications: Language, Individual & Society*, 7(1), Part 1. 292-302; [2]

[社会貢献] 学会誌 (KASELE / The Language Teacher)の編集委員

[管理運営] 「英語A」のコーディネーター

オールド・ドミニオン語学研修プログラム(面接試験管、オリエンテーション)

国際宇宙大学プログラムの支援

L.L. (ランゲッジ・ラウンジ)・アドバイザー